

- 日 時：2020年2月9日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「真理はあなたたちを自由にする」
- 説教者：飯島 信
- 聖 書：旧約 ヨブ記 22：11－28（旧 p804）  
新約 ヨハネによる福音書 8：21－36（新 p181）
- 讃美歌：206「七日の旅路」528「あなたの道を」

お早うございます。

立川教会創立 69 周年を迎えました。来年はいよいよ 70 周年です。

立川教会には、その歴史を語る 3 冊の記念誌があります。

1 冊目は、初代牧師の江口忠八先生がノート一冊に書き残されたメモをもとにして、作成した『日本基督教団立川教会小史 I』です。42 頁ほどの小さなもので、先生のノートから役員が一生懸命に清書して作られています。2 冊目は、『創立 50 周年記念誌』で、4 代目の愛澤先生の時代、3 冊目は、『創立 60 周年記念誌』で、5 代目の高田先生の時代のものです。因みに私は 7 代目で、70 周年を迎えます。

草創期の様子を、初代の長老であった H さんが 50 年誌に書き記しています。その文を紹介し、70 年近く前の私たちの教会の様子に想いを寄せたいと思います。

「視よ、我新しきことなさん」 H.

終戦引き揚げ後数年たった春先、江口忠八牧師の来訪を受けた。立川付近で宣教活動をしているので、協力してほしいとの申し出であった。当時の立川市及びその周辺は進駐軍の基地を控え、誠に風紀の乱れその極みにあり、この地に福音を宣べ伝え、大衆社会への浸透をめざすことは急務であった。

あちこち家探しのお手伝いをするうち、柴崎町の民家を借り受け柴崎伝道所を設立、宣教が開始されるはこびとなったが、数名の誠に少ない人数で聖日礼拝を守った。『2.3 人我が名によりて集まるところ、我も又共にあるなり』と主は信ずる者に約束し、導きの手を差し伸べ給う方である。また国立の平田宅において毎水曜日夜、江口牧師を中心にして、聖書研究の家庭集会を行った。集まる者数名。

しかし 3 年後の昭和 29 年 1 月には、錦町に教会堂の上棟式が行われた。私たちの切なる祈りを聞き入れ給いて、永遠の巖の上に礎石も堅く、この地に新しく神の宮居の上棟の祭りを行わせ給うことを感謝した。（以下略）「教会だより」1988 年 2 月

江口忠八先生が遺されたノートには、1951 年 2 月 4 日、初めての祈祷会に集まった者 6

名、2月11日、最初の礼拝を守る者13名でした。しかし、10年後の1961年以降、礼拝出席は30名を超えて行きます。そして、この草創期の盛んなる時代、1958年に転会して来た一人の女性が記した文章を紹介します。教会とは何か、キリスト者とは何かを問う大切な文章であると思うからです。

「人之将死 其言也善」 K.

鳥之将死 其鳴也哀  
人之将死 其言也善

鳥の将に死なんとするや其の鳴くや哀し。  
人の将に死なんとするやその言や善し。

出典は論語。孔子の愛弟子の一人曾子が臨終の際に言った言葉の一節である。私たちの見守る中でH長老があいつの穏やかな笑顔で一字一字書き残された「愛」と「希望」の文字！私はこの曾子の言葉を想い起こした。これは教会にのこされた最後の言葉であろう。人の将に死なんとするやその言や善し。「愛」「希望」。基督者の大いなる死である。

立川教会の創立者江口牧師も又、私達に最後の言葉をのこされた。「われら真の隣人となれるか。」牧師の説教の時間がだんだん長くなっていくのを私は感じ始めていた。特に最後の説教は隣り人への愛を多方面から執拗にくり返された。「・・・私自身に対して私が真の隣人になれるか。実はこれが私どもの大きな問題である。私たちはしばしば自らを損ねているようなことはないか。私たち自身が自らを損ねるといふことは神の御心ではない。私たち自身が神に選ばれた者として真の隣人として高め育て上げる。又、・・・子供たちに対して真の恵みという主の手を、主イエスの御姿を宣べ伝えること、これが私たちにとって非常に大事な必要な事である。」

私はこれらの個所を何度か読み返しながら、何か云い足りないことがあったのでは？と思う。もう一度講壇にと切望されたと同い、まだまだ伝えたい言葉、のこしたい祈りがあったのである。隣人への愛、それは私自身に対して私が真の隣人となれるかという問題についてではなかったかと思う。この事をもう一度深く、牧師自身納得のいくまで語りかけたかったのではと今思う。将にその言や善しである。「教会だより」1994年4月

私は、江口忠八先生がこの地に立たれた時の思い、そしてHさんとKさんのお二人の書かれたものを読んだ時、教会とは何か、又キリスト者とは何かを改めて考えさせられました。それは、改めて言うまでもなく、教会とは、又そこに呼び集められたキリスト者とは、主イエス・キリストが教えられた二つの戒めを全身全霊をもって生きる者の集まりであると言うことです。掛け値なしに生きることです。出来なくても良い。しかし、たとえそうであつ

ても、全力を傾けて、力を振り絞って、この二つの戒めを守るように努力することです。

その戒めとは、聖書をお開き下さい。新共同訳聖書 87 頁、マルコによる福音書第 12 章 28 節から 34 節、最も重要な戒めのことが記されています。

私は、この地で伝道を始めた江口先生の祈りは、第一の戒めを語る H さんの言葉、そして第二の戒めを語る K さんの言葉にはっきりと示されていると思いました。

苦難な開拓伝道の歩みから、礼拝出席者が倍増以上しても、なお江口先生はこの二つの戒めを皆に語り続けていました。

伝道とは何でしょうか。

確かに、今私たちが努力しているように、この地に教会があることを一人でも多くの人に知ってもらうことです。そして、この地域に生きる人々の、心の奥深くに在る悩みや苦しみに応える教会となることです。

しかし、そのために何が必要でしょうか。

一人でも多くの人々にここに教会があることを知ってもらい、教会を訪れて来ることを待ち望んだとして、迎える私たちはどのような自分をもって迎えるのでしょうか。

それを教えるのがこの二つの戒めです。

何よりも神を愛し、そして隣り人を愛する、全身全霊を傾けてこの戒めを守り抜く者となることこそ、神様が私たちに求めている伝道の道です。

江口先生の立川開拓伝道の歩みに先だって、まずイエス様がこの地にその足を下ろし、歩まれたのです。神を愛し、隣り人を愛する業を始めたのです。そして、江口先生は、又信徒たちも、祈りの内にイエス様のその歩みを思い、それに倣い、神を愛し、隣り人を愛するイエス様の後に従いました。69 年を経て、そのキリストに従った者たちは、今年のクリスマスに与えられた友を加えて、281 名を数えます。281 名もの私たちです。

何が、私たちを捕らえているのでしょうか。

その答えが今日与えられたイエス様の御言葉にあります。

イエス様とユダヤ人との間で交わされた問答の中の言葉です。

つまり、イエス様が教えられた御言葉に留まるなら、私たちは真理を知り、真理は私たちを自由にするとする言葉です。

私たちが、御言葉に従い、イエス様の後に従うのは、真理はイエス様にあり、私たちは従うことによって自由にされるからです。

真理が私たちに自由を与える。

その自由とは何でしょうか。

自由とは、囚われからの解放です。

イエス様を知らずにいた時に私たちが囚われていたのは、何よりも、自分の利益を優先する生き方でした。しかし、イエス様から私に従って来なさいと呼びかけられた時、私たちの心はその呼びかけに向かいました。自分に囚われ、自分のことしか考えられなかった生き方ではなく、隣り人を思いやり、隣り人に喜びを与える生き方があることを知らされたのです。自分の世界に隣り人を迎え入れ、隣り人と共に生きるその時、私たちは自分への囚われから解放され、神の国に想いを寄せる者となりました。

真理とは、世にあって神の国に生きることです。具体的には、二つの戒めを生きることです。その時、私たちは、自分に固執することから解放され、神の国に生きる者となるのです。

繰り返します。真理はあなたがたを自由にすると、主イエス・キリストによって示された真理、即ち、神を愛し、隣人を愛することによって、この世にありつつ神の国に生きることです。そしてその時、私たちは自分に固執することから解放されるのです。

イエス様の教えに留まり、その呼びかけに応えるもので在り続けること、そのことを今日の69年目の創立記念の日に、私たちは改めて覚える者となろうではありませんか。

祈りましょう。